コラム

NPO 法人建設技術監査センター創設１０周年

（工事監査による若い土木技術者への技術の伝承）

NPO 法人建設技術監査センター　代表理事　**五艘　章**

バブル崩壊後、建設業界を目指す若者が減少し、世界一と評価されている我が国の土木技術の伝承が難しく成り、工事現場で事故が多発している。ここに教育的工事監査を行っている NPO 法人建設技術監査センターの「創設 10 周年感謝の夕べ 記念講演会」の報告が全国の建設系 NPO 法人の運営に参考になれば幸いである。

当 NPO 法人は平成 17 年４月、日本技術士会、千葉県庁・日立・武蔵工大の技術士会の会員 15 名により創設したものである。現在は 30 名の会員（技術士：建設・機械・電気電子・環境等）、一級建築士、品確技術者等により工事監査、設計施工一括発注方式支援、竣工検査代行、土木技術者教育等を受諾して、技術者教育に役立つ活動を実施している。工事監査は対象工事に関する「市民との合意・企画・設計・施工・運営」の各段階の取り組み状況を書類と現場で確認し、問題点を指摘•指導する教育的監査を基本方針としてきた。そんな 10 年の区切りを経て去る６月 21 日、「NPO 創設 10 周年記念 感謝の夕べ：記念講演会」を開催したので簡単に報告する。

H17.4.2 建設技術監査センター事務所開所式

講演会には創設時から御世話に成った千葉県庁、CNCP、東京都市大学、建設会社等の方々を招待し、45 名の方が参加され聴講された。冒頭、五艘の「皆様の御支援により倒産すること無く、創設 10 周年を迎える事ができた。心から御礼申し上げます」と心を込めた挨拶の後、分野の異なる以下の講師３名により行われた講演内容を簡単に紹介したい。

まず**山本卓朗氏**（CNCP 代表理事）が、「土木分野と社会の関わりを深めるには」と題して講演された。建設業者は社会から“公共事業で金儲けをしている企業”と認識されたまま、未だに曽野綾子の「無名碑」の世界にあるが、相次ぐ巨大自然災害に対し、ボランテイア活動の台頭が著しく、市民と産・学・官の協働時代に変わって来ている。土木は工学の原点であり、土木学会は市民工学（Civil Engineering）への回帰が必要である。全国で数百といわれるシビル系 NPO 間に連携は少なく、CNCP へのシビル NPO 法人の加入は 30 に満たない。幅広い総合性を求めての再構築が必要である。

次は**中島善明氏**（日本建設新聞社副社長）が、「業界紙記者の取材ノート（我が国の建設産業界の現状と課題）」と題し業界記者の目から見た建設業界について、“ 請負による建設業は産業といえるか？” と。信長と蘭丸との関係等に例えて、楽しくも厳しい講演をされた。

最後は、映画監督である**本木克英氏**の建設とは離れた講演である。本木氏は 1987 年、親の反対を押し切り松竹に入社し、「超高速参勤交代」で日本アカデミー賞優秀監督賞を受賞する。監督した３本の「釣りバカ日誌」では、主役の三國連太郎、西田敏行は脚本、監督を無視してのアドリブの連続を見て見ぬふりをして撮影、山田洋二総監督は神楽坂で不貞寝の間に撮影は完了した、といった映画造りの裏話に聴衆は引き付けられて行った。監督は松竹からの請負業であり、赤字監督は５年間干される。全く売れなかった第一作は郷土の富山県人会が観客動員に努め、第 18 回藤本賞の新人賞を受賞し、認められる。売れない映画の苦しみに耐え、最後まで諦めない監督の生き方に、建設技術監査センターにおける我々の 10 年間が重なる。

懇親会では、関わりの深かった来賓者の挨拶や関係者への感謝状授与などをはさんで思い出話が弾んだ。懇親会で紹介された日本技術士会・西村常務理事による祝辞では 、

“ 建設技術監査センターの様に技術士が様々な法人を構成し、日本技術士会とは異なる立場で積極的に活動を展開されたい。建設技術監査センターの之までの歴史ある運営の実績や成果は、多くの技術士に自信や誇りを与え、手本や目標になる。益々の発展を祈る。”

との言葉に、総会で誓ったこれから 10 年を引き締める次の「３つの NPO 運営の秘訣」を再認識した。

① 一人の優秀な技術者の活動に限界がある。会員の協働と誠心誠意の活動が NPO 活動の盛衰を決める。

② 正当な業務報酬を稼ぎ業務担当者に適正な報酬を支払う。報酬が無ければ NPO 会員は退会していく。

③ 工事監査に当たり NPO･発注者･設計者･施工業者は対等であり、決して上から目線で物を言わない。･

（H29.06.21

NPO 法人建設技術監査センター創立 10 周年感謝の夕べ（於）プラザ菜の花）

欧米諸国では、土木技術者が憧れの職業として「大学の土木工学科受験倍率が最も高い」と報告されている。国の将来はインフラ整備により左右される。インフラに係る全ての組織が現実の問題点を調査・検証し、「誇りを失いつつある土木技術者の再生」に取組んで貰いたい。CNCP 活動の究極の目標も、正に此処にあるものと理解している。

最後にＮＰＯの運営に当り、座右の銘としている教訓（私の技術者人生に大きな影響を与えた）を記載します。

（１）武蔵高等工科学校創設者・及川恒忠の教え

正しい事を正しく行えば、如何なる障害・困難に遭遇するとも勇ましく朗らかに進め得るものである。「志ある者は事ついに成る」は実に千古不滅の心理である。真に自由なる人は廉恥すなわち恥を知る事である。

（２）五艘が奉職した前田建設工業の教え：創業者一族が今も社長として君臨している理由はここにある。

１)第２代社長前田又兵衛(前田一族が今も会社に君臨できる最大の功労者:国からの叙勲は一切無し)

① 誠実・意欲・技術の内、一つでも欠ければ会社は倒産する。

② 最新技術の開発者は名誉を手にするが失敗し赤字に成る。２番手は新技術の問題を解決するが赤字である。３番手は新技術により利益を確保する。我が社は新技術が完成した事を確認して、４番手で行け。

③ 不動産事業は儲かるが、安易に利益が出る工事を経験した技術者は、難しい工事は二度と出来なくなる。私は前田建設の社員の為に、不動産事業には決して進出しない。

※テレビのインタビューで「儲かる不動産事業に進出しない理由」を問われた時の回答。

２) 第３代社長：前田又兵衛（工学博士：覇王とか魔王と呼ばれ、日科技連のデミング賞・Ｎ賞を受賞）

会社が社運を賭した事業により倒産すれば社員と社員の家族だけでなく、協力会社の社員・家族も含めて、多くの人々を路頭に迷わす事に成る。私は社運を賭ける無謀な事業には絶対に挑戦しない。

※前田建設工業(株)技術士合格祝賀会で 3 代目社長がそっと私に囁いた言葉である。今も忘れられない。